燕石襍志

弓貳

㊀ 古訝の訛
㊁ 人口膾炙の訛
㊂ 時代不同歌合
㊃ 逃水
㊄ 一二の橋
㊅ 房錢
㊆ 夕立
㊇ 匂の花
㊈ 折端
㊉ 狂歌
㊊ 大人先生
㊋ 詩歌吉凶
㊌ 山穀妻寡
㊍ 鬼神論

養之亭止

1曾5
116
2

門 イ曾5
號 116
卷 2

甕石雜志巻之二

江戸　蓑笠軒

一　古歌の訛

新著聞集（シンチヨモンシユウ）といふものの中に熊坂長範（クマサカチヤウハントウブク）盗賊のあるよ高砂山に登りしとき
の外に菩提山（ボダイシン）とうりいとくらかりて覆（クラ）れば後世（ゴセ）のちまでとくに句碑（ムカヘ）
うちうち骨堂（コツダウ）へ投（ナゲ）入（イレ）て一首（イツシユ）御詠（エイ）をとるん

高砂山峯の嵐（アラシ）のちづくとかくれ（ノニ）ぬ後（ノチ）のうきみわ　この歌は後名家も然なりとこゝろえし

とつのうきを越（ノヤ）うこの恨（ヌマリ）るべし　妹（アン）とるわ室所勘拔（ヌキ）よ

菩提院殿（ブクワイントノ）高砂山へちうどうをもひて骨堂（コツダウ）へ予（ヨ）も存命（ゾンメイ）うちしかども

ひとのさまいとうちうをかつて御遠（オンハ）を始（ハジ）めんとの内へ一さうをとる

高野山坊ちと嵐のちづくとかくれ（ノチ）ぬ後の世でも

足立藏書

されば搢門貴族の詠歌をあつめ緑林魁首のはやりうたをもしらべとのす
べし侍るやうちたるにこそ
㊀亦近曾印行せし續畸人傳といふものに佐川田喜六あるじ利を近（かの歌は宗因利休すとにいふ事まで善光院殿なりとせり）
衛殿へまゐらす
はしてよしなきことなくいひしが牛の角ありたてまつるなり
これも室町殿物語には昌叱が詠とありいづれか是なるや予は室町殿物語
の證よりうけがたくおぼゆ
㊁亦俗子の生得口号とするを古哥に託なりし
いそがはしきのものを旅人のおとなりちる紅葉の錦
とある慕景集（大田道灌が家の集也）に勝元朝臣短慮切をはさんだと昌黎の作じ
言葉をとちよりそのうちに書けるところのこゝろをこそ聞きもしらず
哀しうたぞなれなかりしを旅人のこれとありもしろい今俗のねんしきらにも女

をかれまじりのまこと託出すはれいもをあてゐふとしもこたへましたまし
べきといふは同じねもぞらずはねれざるべきよみはねれてしめをとして
とわれべきものゝ俗子あすらでもまをしと濁りてあらそのなさとども
たゞくるものおり鶯の声あはりちば雪きえぬ山里のでまちをあらんまと
よみなも山里ゆるく春をあるべきちらでおくらんまといふさとのまし の辨
蛙屋翁の玉霰するもいえうりとてまゐ童蒙のためよいかのこ亦菅家乃
此ん歌霄の空の都の空をすゞねらんとあるをすこもそちぐと唱攑のる近
曾人もこれを論じて物よ書きあらしされば今の贅せん亦代を集よ撰べ
きこれ古哥のこゝを禁を引きほし或は攑まつ讀人の和意をとらえ
るもあるべしものれ敷嶋の道へは深くもるけのらざるふ人の御導とする
べきをる世俗の唱攑をるを正ものとし古人今人佳句秀歌をもあつめ
らく或は寝食を忘れ或は神仏に祈り一字のまにもまたも切瑳琢

棄〜てくらひ定るうのるふたぐらろく唱悔らがその歌ねしさとを打
をしわふべけを不是花ノ中ニ偏愛菊ヲ此花開後更無花ン
いえ積が秀白うるが身ちろとそのの美人は憑く後との字ゆ穂み
らど盡とるべーとひくうセーとどとのの古今著聞集ふんえたり亦
邦ふも松の雪とふ歌を孫くねく松雪と戒名はあそたべとひく
身ちろりし女もありりをぐら歌ふ孫ども孫めく古あるりとも
孫らどよ孫ちふしーと甚〜くえろふた二歌を合〜セートうとう
春の夜の夢ゆあやすー梅の花をもまをもちる人どーる
とちうう顔よ咲どるとちとく傳いられとい古今集まの部て
上の白い朗悟まちの夜のあいあやう物義上の白い友則と若みくだれメそん物義
琴を焼く鶴を烹ふあるふのをやふべくん
のうくいあ、ふとあらは古古の詞書をうえて考歌のお意を失へるもより、

安積山影副所見山井之淺心乎吾念莫國 万葉集 巻十六

とふの歌を古今序まふ万葉の隨よ注と葛城の王橘諸兄をちの仲〜ふく
たりる時よ國のはるさゆちろそろのトくとくはうけふどたくりりんどすさは
うりられびらねはるりる女のうく〜けくりそらめるとれまどたをさとのぶ
けよるとあり亦大和物語まふ巻ノ十九三段まふ菅亜相ありる人のみどよなーイ
とくあーづたる女を内舎人るるのくとりくみちのこのにるりあるる
の那ふとろ山ふらるをゆとびくく住るが男外へ行くりるまたとぶくふと
井ふくくをうつーとるるふあしるもあーびるくるる紙をそどく

浴る山うどくくをる山の井まあくふ人を見くりのくふ
と本ようたをくくうどくくりりふりとよるちり摘要十卯板抑采
女ちろふ二十八文字をくくねて王の怒を女ふらびたると半生の情ふ月
淫奔をるるとくくその身非命ふ死くるとづふ二谷らくと見万葉古今

序にいふ所が實事にして大和物語にあるもしか虚言なるべし大女にわれ哀を禱むるものし采女なる女戻ありしも大和物語の作者を恨むべし

もちべて作り物語は善人を悪人に作りかへ貞女をもよく淫婦にせず懲悪勧善を正くするを作者の本意ともちべし然まし古歌なりき浮けてとあらん難なからん歟

◯歌は詞書をよく深く余情一トしほまさりもあやうき右大将道綱の母君の

なげきつつひとりぬる夜のあくる間はいかに久しきものとかはしる

とある詞書なくても聞えぬにはあらねど詞書を添て一倍の身にしみて覚えぬ扨此大鏡の巻の五に大入道殿 兼家 のとをいふ所に次将君陸奥守倫寧ぬしの女のはらにおはせし君みちつなと申すなる西洞院なりしか右大将にかけなりたまひこの母君きはめたる和歌の上手にておはしければこの東三条どの我かよはせ給ひけるほどのこと歌など

かきあつめてかげろふの日記となづけて世にひろめ給へり殿のおはしましたりけるに門を遅くあけければわびぬといひ入れさせ給ふに女君

なげきつつひとりぬる夜のあくるまは云々

とあらたりしと申ければ

げにやげに冬の夜ならぬまきの戸もおそくあくるはわびしかりけり

さて此の歌のこころはなどか門をばとくあけねぞと度々消息せさせ給ふ程に歎きは増りぬ独り寝る夜のあくる間だに今宵のあくるを待わびあかしけりましてさらにとはせ給ひし御恨とはいかにあらむこのころの道綱卿の母君の歌は百人一首にも入りて婦女もよく口ずさむなりてよく書つくしつかたの事が解をまたずしてよく知るべし

㊁ 人口膾炙の歌

陽春白雪の曲は世俗殺遠ざくしてものかく巴人下里の調に至りて和する

ましてねもころに一唱三歎をしらべなるこそ信言不美。美言不信と
老子もいへり夫燕雀は大鵬の志をしらずと庸人は聖賢の言に通ぜざれ
歌も又しかるべしされば歌は世俗の耳にはなんとも生平に口号とせ
和平連歌のころまでも秀逸にあらずと一犬形に吠る群犬声を吠ゆ
これもしかはあれどもすぐられは何の集にも見えず作人の詠ぞしとするに
ぞ稀なりとうけたまはりしに註を
うんすんもうたてもふる歌も古器よくふげて後は常の作にもられ
相摸國新井城主三浦義同入道道寸辞世の歌として人永正十五年
七月十五日に討死せし鎌倉管領九代記に見えたり
金ひらふ笑ひ笑ふて笑ひけにもとするとえし也め入正由え
濟川は百首題狂歌集にえいる集は寛文十一年五月の比印行せり狂歌
八百首建仁寺雄長老。明心居士。貞徳。安井守慈。好竹。猶彰。布留田造。

平郡實柿ホ七判の詞は中院也足殿にとぞ今俗の夢は美云
さながらいとまる美は貧の正客と號せり
盗人をとらへてみればわが子なり
これは宗鑑が犬筑波集に切りてもあり切らでもありといふ前句に付たる
なり貞徳の淀河（犬筑波集にもあらず新撰犬筑波集也）には第三句に隣の藪の竹はいられぬ
さて自注に竹の子人をとらへてみればといふ隣の竹のうへにはわれが子をとる事の
なり世俗の口順とする所なれども過て風雅に忘れられたるの俗を離
るとを本意とすべし

㊂時代不同の歌合

左　日本紀竟宴各分史得大鷦鷯天皇　皇太后大夫藤原朝臣國經

わかりたる年とをめぐみしすみしこそ世をよとせあまりにまさりしぞ

右　一條院をとまりる　後京極摂政藤原朝臣良経

十五

昔はふべれ袖もそうかれ世のすゑ寒かる民の冬のくるしく
十訓抄に云 仁徳天皇ハ三年の間みつぎ物をとゞめて民の烟の賑へる
を悦とおぼし 一條院ハ冬の夜御衣を脱て四海の民をおもひやられけり
とりわけかゝるべうもなくとぞ仰られける是又賢王聖主の普き御恵を
黎元黔首までに及しが故に古今に不易なり君ハ民をもて躰とし
もとより王ハ兆民をあはれむものなりおそれを捨たまはざらん近ごろ後京
極摂政のくどうこゝろひとつよりもふべれ云々亦続古事談に帝王ハ人をあはれ
み民をめぐみ給はずんべからずなれば 一條院ハ極寒の夜ハ御衣を
脱のけさせまします上東門院などかくハせさせたまふぞと問まゐり
たまへバ日本国の人民さむからんにわれかくてねぶるはむざんのこと
なりとぞ仰られける 延喜御門もさむくさゆる夜ハ御衣をぬぎて夜ル
御殿よりなげいだしぬひとひかりとひとつとこそ曲亭子云是のめのをとゞめ

て民の竈を賑ハし御衣を脱て民の寒れをおもひやりたまふ御仁慈いづれ
を深くいづれを浅しと申すべうもあらねど世俗ハ只 延喜帝の寒夜に御衣
を脱たまひしをのみしりたまひて 一條帝のみんなるをしらんものなきハいかに
ぞや愚按ずるに是彼久しく伝あやまりたる欤古事談に 一條
院御宇。源国盛任越前守。其時藤原為時附於女房
献書其状云苦学寒夜紅涙霑袖除目春朝蒼天在
眼云々 天皇覧之敢不差御膳入夜御帳涕泣而来
給左相府参入知其趣此忽召国盛令進辞書（一本書に有恨字）
為時令任越前守国盛家中上下涕泣国盛自受病
及秋雖任播磨守猶依此病遂逝去。云云。如此とありしを
伝あやまりて 一條帝ハ寒夜に御衣を脱たまひしといふことを
伝誤りて醍醐院のみんなるにとりなしぬるや大鏡巻之八（五張）にも 延喜の帝の

寒夜に御衣を脱ぬしへゆえうとろ浪ぐさ　　ふみ人ちくん

右　古今集又見二十伊勢物語亦大和物語巻七巻女郎花物語巻中巻

風ふけば沖つしら波しらなみ夜まくらに君ぶひとりぬるかな

右　大和物語亦見二十二訓抄巻十第七巻女郎花巻中巻第九巻

ふみ人ちくん

これもちくるひとこと人とひられ今ととそる声をのこすけ

右古今集に貫之云ある人のうたひしに大和国のりの人のもとに

ある人をこころざしてのりの女親もすくなくて家もとろく年行のびぬる

をとこありけるのちの国に人をあひたりけるのちかれにけるを

さりけれどもつげやるべきこともええずやらいでぬる男のかへりてはい

ひ出ずりけれどあまりとおもひてくりかへしうたよりやるとてよみて月の

出りてのりの夜のうちへいくとしたるをみてとんさいのうるはしくさてうたれば

歌物がたりにくに琴をとりてまくらの下をたたきてねぬれ

ばとりつくれをまくらにしてほとんどあけぬるとしのひ侍るとなり

接ぎ歌に萬葉集にこの沖津ちく波立因山にたちそえるん妹がこと

ばとりあるとをとれを顕昭いはくたちとしらんとてく地名津白波とい沖津白波とい

とく風なびくとめる序歌といへり

右大和物語に云大和の国に男女ありけり年月をへてとしを

たりけるをいとをしがりてもあるべきものとおもひてこの

をとめをとこにあひてとりてとらんと更にいひ

ぬ夜の長きにめをさましてきけば鹿すん鳴くなるのもい

とをしくなりて弧を隔たることばのやうにとひられば行くとい

らへはべこのちのあらの国のひとびとさく行りとをくへけ

をとこにそれをいとをしがりてあとにひらればをんなとひられ

あるゆへてど人に云云とよみたりけれハかたりかくめでこの今のめでを
非く定てめとのどうかんをみてよりたる曲亭子云婦の嫉妬するゑる百
拙を掩ふとのへ是二歌ともふかき情あり或ハ夜あるさとある男のあ
ぞうをどがうくノあるゝ恙るかうんみをとひ或ハ壁を隔て後妻とまを
ありし姉まん僅にこそひとめぐをつらねてをとこあまりかゝその
すへつをちうしたるいとく宥ぐてぐるべし世俗に伊勢物語の事をよんて
大和物語の又かゝる貞女の歌をよみたるをもゝくべりりて今一番の
歌合ともいふへきものハ大和物語女郎花物語ホにこの二タ歌をあげへあるもし
かすゝへ是楽て淫せん哀こて傷らんといへるなべ深をやらふべけれ

㊃ 迯水

夫木集第廿六雜部八俊頼朝臣のうた
武蔵野によりとよみつる迯水のみげかくきても世をすぐせる

この迯水といふものハ實の水にあらず春の曠野にかげろふを遠く眺
むれバ水の流るゝ如くにみゆるをいふなりくさなるものゝ野馬陽炎と
もいふなりとひふみのかたち根ぐ所ありたるに歟を

性霊集詠陽燄喩 見于巻十第六十二張

遲々春日風光動。陽燄紛々曠野飛。擧體空々無所有。狂兒迷渇遂忘歸。遠而似水近無物。走馬流川竹處依(以下畧)運敞註。智論因飢渇悶極見熱氣如野馬謂之為水。疾走趣之轉。近轉滅。走馬流川谷謂陽炎狀貌也。

迯水の事これにて義審なり俊頼ハ空海のうたによりとづるならん

㊄ 一二の橋

其角が五元集にハ解わけて發句あまたありて俳諧者流これを註し解す

まるも亦勘うべ

ほとゝぎす一二の橋の夜のけりかとうふ蔬白い解ぐれまもの

らねさの二二の橋を江戸本所なる一ッ目二ッ目の橋ありとかの人うり

ちるとうたい一句ゆえど其の南が蔬白い搭をとるれたる新声寺ーと

いえども此名を私よりぐめくいらふべうべ本所い昔より一ッ目二ッ目と唱

く一の橋二の橋と呼たるよりの接ぎる一二の橋い山谷洞深草よ有

雅一別府志第九巻古跡門ノ下に云。月見岡在り伏見に源平

盛衰記に云。源軍或自伏見に赴き尾山月見岡に到法性寺

一二、橋に云。山別名跡志巻十二に云。ン橋、在り東福寺北

門、北一町餘伏見街道、中央に従り此南、方東福寺、資由

九ッ八町、内に有り三、橋。是其、一也。曲亭子云。法性寺い東福

寺北門ゆの南。西面よりり盛衰記よ法性寺の一二の橋とうるとゝ

とのころ法性寺の境内ゆ属ちゝうるべゝさて其角が蔬白い古歌どう

ゆり拾遺集よ壬生忠見が

いづくよ啼てゆくらんほとゝぎす淀のうらの夜ふかるこ

と絵ゝゝをとひうゝて大坂ゆ夜船よりゝ京のぼりする人淀のうらの

をすぐ夜物ゝたかうりたるも深草ゆ東福寺のほとりなる一二の橋を

渡るうろへ的ぐうるべゝさうべ淀うるそ夜ぶうよりし杜鵑も一二の橋を

い横雲のひゝうよ一声二声ゆとぐれうるうゝよ赤めぐうゝてうちうと夏の

夜の短さ旅泊の餘情うよ殺毒をぐゝうべ赤晋ゆが

いづくうるも淀橋ゆうぐほとゝぎすと咽ぐゝうれい江戸四谷の西ゆ子

淀橋を淀のうゝうよりひうゝたりうゝはえぐゝ一二の橋ゆうるうイ

ゆうゝゝゆ水も浅うるうゝ

赤ぬし集注

窓銭のうた世をもるらん雪見かな　其角

或説よいづれの比時よりか窓一ッよ鳥目二百文の課役をかけられてける事ありられを窓銭といふ其角がうた世をもるらん雪見かなと咏けりいられぐとぞへりしらの窓銭の事ものみすぐしさる割度ありといふにはあらで所見なりしかやそのかみありとも雪見は月見ともまたべし北窓閉るといへる十月の頃は冬は窓を閉て隙ある風を厭ふのみなりてられの發句意わ按ずるに窓銭は房銭を誤る歟其角が縁草を假字にてヤド銭と書るやをマドに誤て真名は窓と書し印行せしなるんそれを後人強てこの句を註せんとて無稽の説をなすなるべし」事物紀原曰放房銭宋朝會要曰大中祥符五年正月以雨雪寒應店宅務賃屋者免僦銭三日此之始也七年二月詔貧民住官舍者遇冬至寒食免僦直三日此節日放免之始也其角はこの故事をとりて雪を咏ぜしならん房銭は宿銭なり賃屋は貸店なり僦銭僦直とも賃銭の事なるべし宋の大中祥符五年正月雪のふりし寒けれをもて務賃屋のもの三日の僦銭を免しなひしとて異朝にはありしなれば今降る雪をみてうらやましくよめる句意なるらん

㊆ 夕立

元禄六年六月廿八日其角が三囲の神社祈雨の發句は世挙て人の知るところ也其角が自筆の短冊 三囲稲荷別當真珠院什物 并に五元集にも夕立やと與名て書けりしかるに世の人これをゆふだちやと讀はあやまりなるべし夕立や田をみめぐりの神ならばと讀べしられ読則なりある人これを難じて夕立は一句の題にて歌を用ゆるは夕だちやと讀むも...

とも云れ亦隠く五え集ゝこの禱雨の歌句をもるもの前ゝ市中白
雨といふ題とよりて
鶯の香も夕ぐれつゝ腥しとの句を載ゝとれ々ゝ立ハ題なくして
是を用ゆゝ夕ぐれつゝと俗ゝ云るゝ禱雨の歌句もゝゝやと続ゝを
もるゝ〳〵禱雨の古歌ゝ天の川のくちおけぬく小町ゝ歌ゝ苗代水をもゝ
もゝ紙同上ゝ歌ゝゝる欲得のゝ糸を繁をなすゝゝもゝと歌ゝ云ハ既
ゝその雨の降るをひゝべしゝ〳〵もゝ禱雨の義ゝ稱ゝ美濃の雲裡ゝ俳諧論
とふものゝこの句を評ゝゝもの俳者常ゝ大酒ゝゝもゝもその見ゝゝく醜
たりゝゝく醜ゝゝ歌ゝ耶も私ゝく全ゝくそのゝゝ虚ゝ虚なる故ゝ天稟の趣
向を仮ゝゝ天稟の趣意ゝ是ゝ感應の大角ハ降ゝられども晋ゝハ一生この
意をもゝゝゝしゝ知るべゝ〳〵とゝくゝハ傍義ゝ人の大言とふべゝ毋りゝす
ゝゝ句ハ晋ゝ當坐ゝ沈ゝ若ゝ〳〵ゝゝるゝのゝゝん歌ゝゝゝとゝ小一

句の玄妙ゝゝゝゝゝゝゝゝを吟ゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ五穀豊作
を祝ゝゝ五七五の上ゝ四ゝゝとゝゝたるハ奇ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
意ゝゝこの句を得ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝ後生元庸の批判ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ偶然ゝゝん歌早霖ハ人力のゝ致ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ明雲篇を披閲ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝの続則をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
類祖ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

(八)匂の花 附 折端

俳諧の附合に名残の裏の花を匂の花といふ何の故にこの名あることを
知らず。予総角の比俳諧師にこれを問しにその人答て一座の連歌名
残の裏の花前に至れば宗匠立て香をたく事あり。故に匂の花と称
ふといへりとてうけがたくおもひしが又一人に問ば名残の花は一巻の果なれば
とてかゝる未練の恋着に附るを許すどこの花一句をかりて発句なり
めでたき故に匂の花と名づくと答へれどいづれもうけがたき説なりとおもふや
疑しく思ひしが年長てふと思ひ出しに韻は匂ひと訓ず。匂の花とは百
韻満尾の義なるべし。静斎老人随筆に句は韻の省文なり。韻韻同字
なれば韻をにほふと訓せしならん。流風余韻の韻の字をにほふと
読べきの証なり。且古人訓釈にこれを用ひしかば推量られて感心せしなり
まりて此ありし連歌の附合長短百句に満るを百韻といふ韻をにほひと
訓ませしも名残の花よりの月なるべきその韻満尾の花といふべきを略し
て匂の花といふなるべしとおもひて解して人にも語り説示せしが今按ずる
に自他の説にも非ず。物の尾に至て皆のがれて尽るを匂といふ。薫蒸
の説に従の威光に匂ひといふは譬ば薫物などの意なり。初のほどは香気
しるきも末に至る程ほのかになりてその香うすくなりて香気消失るなり
威光の匂ひもこの意なり。またそも袖草摺の上の方は色濃くそれより段々に
色薄くなりて果は白きを紋付匂といふ。また刀の焼刃にも匂といふあり
亦婦人の眉をつくるに黛の薄く移る所を匂ひといふとあり。いづれも右の
意にて名づくるとなん。しかれば匂の花もこの説に因て解すべし。一巻の花
とて果るをもてにほひといふなり

○亦俳諧の附合に裏表のをはりの短句を折端といふ何人かこれ唱ちが
たるうつ知らねども元禄以前よりの名目にはあるべからず。その短句を端

といふは蕣菖ちがえる名月なり字書に端は首なりとあり正月を端月と
いひ初の五日を端午といひ事のそもじめを護端といふ和訓にてとはちがめの紙
異ちがえし紙のそこなるべしそこなるどりふちもまる端ふる紙のちがめかく
べしそこめしさんが折端といふこれは折のちがめと今いふ裏うつりの長名み
どを折ちとは唱ふべけれ當初穿鑿足らざるに似たり
周ちいふ俳諧四季の題ちその中正月の部に三ツ物賈といふものをいで
ちり予曩に俳諧歳時記を編輯ちられを削去らんとおもひ
予が意を猜ちるものは漏ちちとちんちる註ちんとそれが忘むべし
そこ爰ちりちちる舊名を載ちられ三ツ物ちん蔑名脇第
三をいふ正月の部に入るたる歳旦の發句を第ちとれば三ツ
晩賈といふものはその野鄙なるゆゆしうもあるべど實亦の比三物賈と
いひえ緑の比前句拾ちといふその辯春臺独語ちんえちり玉律嘔の

神の衛後に今ちちの絶ちるゆゆ俳諧者流のまもり
ちのふべし

㊈ 狂歌 大人先生附

後撰夷曲集の奥書に狂歌は撰集に夷曲歌ちとあり狂歌と
名付ちるゆゆられを狂孔狡猾のゆゆ比と送恨のゆゆ坊ふる夷曲の
曲の字を枉に書悔りられを亦狂の字に読悔りて狂歌ちとあるゆ
ひちとり拙ちるちの後迂僻ちて信用ちがたし古今集の俳諧歌續詞
花集の戯笑歌その名月は異なれども夷曲歌ち後世ちれを狂歌と
いふ夷曲の曲の字を枉に悔りられを亦狂に悔り夷の字を腹ち
狂歌と唱ちるゆゆ唐山に俳諧體の詩を狂句狂歌などいふを明
劉伯温が連珠に狂歌之士遣世若草莱とちるいられ有ちられば
詩に狂歌あるに財ちく和歌に亦狂歌とちんも嫌ひあちど夷曲戯笑

を、天朝の名目なり。俳諧狂歌は唐山の名目なり。異邦の名目を
もつぐ古今集は誹諧（誹俳音通）歌と云れ、を行とはいはんもそらごと
東曲歌を狂歌とはいはんも嘆ふべきなるべし

○ある人予に問今の狂歌者流相共に先生と稱し大人と稱を世俗先生を
大人は優遇とはいはんの稱呼その中にもはしめへとのあ予これを答て
いはく書言故事に稱年長曰先生章服辨名古者稱
師曰先生と云へり論語憲問篇蘧子將命或問
之曰益者與子曰吾見其居於位也見其與先生並
行也非求益者也欲速則達者也これ先生なる師をいふ子
罕篇子曰後生可畏焉知來者之不如今也四十五
十而無聞焉斯亦不足畏也已後生は少年をいふ十五十
六を長ず所謂先生なるものなり亦大人は書言故事に子稱

曰大人漢霍光霍去病弟也又中孺平陽人以縣
吏給事平陽侯曹壽家與侍者衛少兒私通吏畢歸
娶婦生光同絶不相聞不知少兒已生去病後去病
為驃騎將軍擊匈奴至平陽傳舍遣使迎中孺跪曰
去病不早自知為大人遺體云云へ漢の時既に父を稱
ふる大人とぞり亦孟子にいふ大人は德盛ずして文明なるものなれり孟子
盡心篇孟子曰有大人者正己而物正者也朱子註
大人德盛而上化之所謂見龍在田天下文明者
亦曰文篇有小人之事有大人之事且一人之身
而百里之所為備云云此ふも君子と大人とぞり漢の時商山の隱士夏
黃里先生と稱諸葛亮南陽に畊ぶ梁父吟をうたふ臥龍先
生と自稱ぞり但大人は世わろくいとぐ良稱なるものを用ゆるぞ

大人の稱呼先生に優まると遠し亦按ずるに皇胤紹運録に武内宿祢の孫平群真鳥の子に紀大人といふ人見えたり亦平治物語源平盛衰記亦に帯刀先生義賢あり併られ是を職に唱るのミとなりて大人ゝ之生と同じからず大人をウシと読むは日本紀に見えたる人

○捜神記云舊説太古之時有大人遠征。家無餘人。唯有一女牡馬一匹。女親養之。亦是大人ハ謂有威権者也。見于巻十四

(十)辞教吉凶 附五穀ノ事

賢者之言曰。禍福将至。善必先知之。不善必先知之。故至誠如神。信哉此言也。気之動物。物之感人。揺蕩性情形諸舞詠。照燭三才。暉麗萬有。霊祇待之以致饗幽。禍福不招而来。謂之天。吉凶不求而得。謂之命。

或謂吉凶前定。或謂禍福無門。夫命運ハ非人所能也。而人能致之。致之未悟。身枯人始悟。不亦遅乎。

○本事詩曰。劉希夷嘗為詩曰。今年花落顔色改。明年花開復誰在。忽然悟曰。其不祥歟。復遺思逾時。又曰。年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。又悪之。或解之曰。何必其然。遂両留之。果以来春之初下世。

○崔曙進士。作明堂火珠詩贖帖曰。夜来雙月満。曙後一星孤。時以為警句。及来年曙卒。一女名星星。人始悟其自讖也 共載于廣百川学海

○歌をよむとてもあいさつのやうにおもひよれる事あれバえせぬことなるなどさしたる事ひとつの紀をりふしも述懐がましくあれしくしかねさることなきようなるハ先達のいましめおかれ侍りかの雨中吟といふがかつねらるるの不

ひか定家卿さぞ歌ゆ世ゆるもこそ
宗尊親王作り給へる後嵯峨院のみこ
ゆゆしきことのさまあれとも先ゆ為家卿
陸奥のうへ山さるる世のうれひ出来
なるべしゆゆしきことゆ人ゆとゆのゆ
ゆゆしきことゆ
こゆゆしきことのゆゆしきうれひ
うれひ東方朔がとゆ用ゆ則為虎不用則為鼠
ゆ異本女郎花物語
亦一説ゆ宗尊親王首の歌をあゆ
為家卿ゆ判ゆ
ゆ世ゆゆ危ゆゆゆ
ゆゆゆ
ゆゆゆ世ゆ

○光厳院の正慶二年春二月のころ東軍ゆ敵の城を攻ゆ
姉小路ゆ
九郎左衛門尉師宗
左衛門尉
嵐ゆ花のゆ
ゆ軍ゆ
不吉ゆ
ゆ夏年五月廿二日ゆ至ゆ高時入道
○近世松崎蘭如ゆ大膳ゆ
歳月ゆ忌ゆ
大ゆ三ゆ
ゆ服ゆ
○平ゆ物のゆ世ゆ安永九年の歳月ゆ

何の式かの式りなり宿の春と咏ぜられをせく人凡禪しとも
墓しに警句のしるくせよ文まどらぬ隠者なりともこの世よりくんりのれ
形の式なりどやいと織りしの果しくこの年月きりぬ

○亦天明の年間俳諧師存義が歳旦の發句

信濃なる織黄布ゆやとり男と咏ぜるをある人難じて浅黄布子
を幽服なりこの句に殺やうなと嗤くく形よりの年存義いひなりくなりぬ

○亦天明五年俳諧師蓼太が歳暮の發句

くれぬとも貴きぬ石あり年のくれと咏ぜくく次の年月きりなりて

門人某甲予よこの句を物ならくくこの師去年の暮貴きぬ石ありと咏ぜん
今茲墓碑を建る前象なりとつくこの二人い母のく稀石よ及ぐ義とる
くれいをくくもあくねぬ齢なるべしさのこい嫌忘よ必ぐらひく鶴亀のめぐる
ぜくこ紙ひくくべんもをくくねど假初よひ捨なる狂連歌も時ときとひ

あんとることあり寄永乙未の春ごろ蓼太のうくく岳法發會の日ふのこと
とふことを向の五七五のをりなりあれくへあくく亦のとくくくくく老の梅
とに吟のひけるこの年孫生の末の六月よりくくなく失怙の憂あり

亦寛政十年の八月八月氣兄病中の吟よへ秋風や雁をくくこの
蓼の家。とぜくくくれいこの蓼へ蓼柳中春のけれの蓼く年。と作ちと一對
の題向く蓼の陰ともぜれくこの向れくく予蓼とりの字をを忌く蓼の陰といんを
とくくひくくこのるべんとひくへ行りなくこのる竟よ辭世とるりよけんべ寄なるもく悲しく

○人間一生を五十年とえと十五歳ゆぞい蓼路をなる如くく殘てこ三五年あれど
夜八刻くく人事を見ぞられを貢疲よ別るとれい僅よ十七八年なる程
く限ある年をなくく一月半酔もいくぞくくこの過さんいとをくくなるべれへあら
ぜゆ且食ふ米の米いくぞくもあくくどゆ生をくくなり十五歳なるべ一日の食を
白米三合とえくく拾六石二斗十六歳なり五十歳なるべ一日の食白米

五合とうえて六拾三石七統計七拾九石弐斗うれを三斗五舛俵ずつ
弐百廿六俵壹斗うるべし縱六十ずつ生るとも三百俵の米に過ぎず彼
晉の陶潛が五斗米のために腰を折めずといへる隱逸に倣ひとも
うるの米は食んとすれば小利を貪るべし物ひとつ人に物借ともその朝
に後るゝひまなる人衣食に奢ると活業に懈るとの油斷ならるべしさり
とて食の所の米いくばくもあるべしども稼ぐ皆辛苦しつゝ耘耕ちゝ
ゝ紙ゝ妻娘しつゝ飽ずゝ食のみにもあらず世のが天禀の福のそなは
らばこれ有べし　聖代に生れあひ久しうの嗚呼ひとりの
抗彼峯のうばれたるものも孤るゝ限なく　惠ちゝひとみなの川の米ぞ
も潤ふべ濁らぬ通に遺たる米拾とゝ疾もゝ續ちべとの和漢の
ひとへうもゝうこれを仰げばいよゝ高しとも忘れぬ忘れぬ身の
ほどゝを勉るべ二百廿六俵の米を汲んに若ずうゝと耕ぬべ

唐山の常言にゝ空しとゝ泰平の民は安れるのまゝ
身に汲る湛べ見るとをたゝべる家にその志富りの稀なりしゝ寛永の
ちゝめ八十ばかりまゝ幸に幾紀暮ありゝ毎日に烟をゝ拜ゝ
天下泰平とのゝ禱ゝ笑ひて嗚呼ある暮もあ
るゝ公事に世にたらに身にもあるゝ世のゝ孫咒の禍は新ゝ天下泰平と
のゝ禱ゝとゝ暮れゝ新ゝ暮れゝ慶
長のころを壯年とゝあるとゝ人は夫面にたちゝ人ある時は自分のわをゝ潛
ゝ辛ゝ生延たゝ長閑に暮ゝ世のが孫ども
を艱ふらるゝ代万代の後世ゝ孫ども
願ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ虎に逐ゝ走るゝ画る虎をゝ人ゝ
世ゝれゝりとゝの物語もこの暮が教るべし

二百廿六俵の米ゝ人ゝ出ゝとあり今人米穀の妻女を緑ゝ人

高仆石仆文と書この高ハ高ヤの義よりおくじ孟子よ五穀多寡。同
久 則 賈 相 若。とうえくり高の訓と寡寡の音と近化をうく字のを
備うく高と書欠孟子の寡寡よみあべ

㊤ 鬼神論

鬼ハ大陽の精ス故よりれをうるものくどその色赤ーとあるひハ
りの鬼神ハ陰陽の義ゆくと王充論衡よりて亦史記黄帝の本紀の
注よ死而不亡。謂之神。死而不祀。謂之鬼。とうえくり愚按
ぞるよ神ハ必ゆり鬼ハ気ゆり人の心気ハ秋ゆ鬼神亦秋ゆ人の心
気ハらく眼目の視るゆよりくども鬼神のえがたれをゆくるべ
王充ハ人死ーく鬼とゆくべ古来今往死とるものの幾億万人世間鬼を
若よ處ゆくんとハくとの論ハもぐ盡さぐる故人死ーくその魂
ハもぐ散ざる何ハ寃鬼とゆりて人の眼よりえるものあるべ我俗とれを

幽昊とりハとれをうるとれ雲霧の如ー雲と霧とハ天地の気ハ天地乃
氣ゆる故よ秋ゆーその秋ゆとハくとも繋るとれハ人とれをうるゆと
ハくども散ぜるとれハ絶くー跡ゆ気息ハ人倫鳥獣の呼吸ゆり出その
呼吸ゆる有よ秋ゆー秋ゆーとハくども天寒ゆれ朝ハ人とれをうるゆと
ハくども隨くー滅と寃鬼の人よりくるくもその魂魄ハもぐ散ざるあるひ
あるべ其人死ーと駁の身を殺たらんもハ魂魄ハ散滅と寃鬼散滅ーく寃鬼
とゆくらんと欲するともくちんや皆是狐狸の妖怪のこれをうく
りのその狐狸ゆるをもくどゆくくんを寃鬼とハくとれ知らざるゆ
迷ひ塩尻云。玉笑零音云。人之初生以七日為魄。人
之初死以七日為忌。一魄而一魄成。故七七四十九
日而七魂具矣。一忌而一魄散。故七七四十九日而
七魂散矣。故知鬼神之情状。とハくりハのくハ亡者の追薦ニ十

九月すゑつかた止この月七魂散ぢるが放うり散じて後亦聚ることあり壁に春の
氷の解るごとくその解んとするとき先づ碎けて水上に浮ぶものの人死
せしこゝろもその魂魄のちぎ散じぢるが如く氷解て水に帰し魄散て
虚に帰せば寃鬼の祟碎ける氷の水上に浮の類なれば鬼神も滅さるべき
あり寃鬼の祟強ければ今をもつて何ぐの院なる一僧抵店に手て
拠りたる易経を購ひ求めうきまに披閲せるに朱をもつて点を
注せりその祟一つもなるべきなり僧堂を掃て大なるあぐこと笑ふに於てその
夜微頃に発熱孔痛して病を五六日ほどして死んとす又某の所に儒者
あり一夕その門人某生忽然として来れて儒生にもとめて
曰く昨の月黄鼠の穴にありたるあぐべきと問ば門人いふ
ちりとといふちりぐ今何の故ありてかの所にゆちんと所且門人
ちち微笑ちりぐ易学注ちんとちりて受年苦むちるるべきとう

ちりこゞ生とべたちりて死後いく日もあらぐ妻ありるをんなこと
所為の書籍を賣へた易に朱のが年来ものれがとを
ノ見ひるに某の院の僧抵店に干て彼易経を購ひ求ぐ祟ッ
とるべきなりとあぐこ笑ふが慎りとべ矢庭に渠が頭を打て懲らしめる
五六日に及ぶ彼僧今三日ばかりまでもあること死とべ儒生
に托て責傷が病牀を訪ひ面あてりうが打懲らしめをんを
わちちんとのに儒生ちち且しとのちくるが憤を懷れど彼
僧にまと原来怒るに其の言の妄誕なるを怒てこれを殺さぬ不仁
ちりや身を殺ちて仁をなさどとも子がどれにあちりにちねしく落
ちちとのに諭ちが門人ちぐ沈吟して先生の言固よりとちもれ今
その處を失へるをもつて放ぐちりとの儒生にもとめて彼者に
墳墓を建立ちて彼とべ其外に處りとのにちけあつねとらく

ほくの死潜に出うえうどをうりぬめ〳〵と儒生八次の日彼寺に至りて絆の
兢を告げ申ければ僧驚き怒て怖れ怪しみ其人の墓碑を造立〳〵と
叮嚀に読経すること七日七夜病母母〳〵後遂に禍なし〳〵とかの
怪談ありしかども更に例の怪を物語りあはれどまことをもむかの
ちこうりこまどもゆうりあるの異妻に相則をとりたのびくに和ふひ
られば嫡妻これをねたみとりて彼の妻に夫の出る隙ふさぐ
出ずるをを刺ところ〳〵二ツあるを刺んとすれば夫の母外面より来
りての景迹をえて大に怒り死矢庭に小児を抱て又外面に走り去
まれば母はなはだ婦人忽に自殺して失ひたるを〳〵夫も母のぶ悔を
悔て妻の狂乱を哀み後のあるべきをとて稚児を難ぶ〳〵とき
ありしが辰巳なるべの親族のうち遣して絆の母ちかるをもめ〳〵して
雑言をなられと頻に聞ゆるに推辭ぶ〳〵家に女あるとぶ嫁らぶ

孫とい〳〵のありしかぶ近隣に小児あるあり乳汁をもつて両三日飲ませ
に彼親族の女多られに浴室にゆくとき急に彼稚児の母に呼ぬ怪しと
母のひ〳〵ものをもゆいそぎ見ぬやに走るとこや〳〵と呼びとぶ児の養
育浅からぬるとろとびなえちぶ〳〵せん身が體を貧〳〵ゆられとい
ふ〳〵怪〳〵死の限をうれど母をろ〳〵ものと張ひ〳〵家に走る
ゆりしがその疾俄頃にしてそ次の日も起ぶ孫に怪しい彼稚
児が帰後ぶに病人られを抱れあげて乳を含ませる處女のれど乳汁
やはりんとろうぶに吸て飽とあるが如〳〵ものとの児を嫌〳〵ぶとする
に声音も面貌もその母に似〳〵ぶ亦稚児のらく眠をする時ぶ忘れ
るが如くに物のひざまも舊の如〳〵怪しいものべらるのねばその兎
の父のも絆の兢を告ぶ知し追薦の仏事を叮嚀にとり行ひ乳母を
〳〵彼児を親育せ〳〵ぶ女の病ひも遂に快〳〵後はまんと〳〵怪しとか

ゆもつりしとぞある人むかし月経ちてこれおそれ亦
ぞんのん時ぞれの里の中忘れよ市人の妻ちごめてこれを生りるが
産後遠よ沼肥ちごーこ身よりねその死んとこれこのまへ
乳母ーこ家ものこ雇育ーまへ里親ちどりのこ拵遣ーあひそと
遺言ちこりれど原来富ものこねば乳母を雇んこうーと里よと
いのの遣ちこ移よ一宿成程こ里親その児を送りこーりこ
ここ後よなびーこいと怪とちひこいこるあこのこをこーのこと
因よ里親答ここの児産ーこ移り仕れど夜い通賀遠こ暁よ及へ
ここの啼とれ雑とちこど外面よ女の声ーこ児の名を呼びこべる
ゆい怪ーれるのあるふこーまものこるここいこしの又い忽こ
悟りこふこ悲ここれこりこ人の乳をこらひ仕こその児を言ーこ怪と
ちのゆこりしとぞとびこ子ぞ親くきこるこのこりーと一事も文を餞

らんゆれい世よ寃鬼はひひぐと我い書籍を愛惜ーこ或いこのこよ愛
着ーこ魂魄いこぐ散滅ちぐ人よ解こ声と形こあるが如ーちこりこも
魂魄久ーこ凝滞ちるのこらぐここを後遠よ怪ここ寃鬼こ臨
絶の餘煙こりこぐこりこあこ寃鬼こるこのこあこぐ王充が論よ鬼い
人死ここるのこあこぐこいこも不可こ仏者の説よ鬼い人死ここるこの
こいこも不可こ鬼神よこつこ天地よりこい陰陽こいこ萬物よこれ
を死生こいこ人死ここその気散ざこを寃鬼こいひ陰陽凝滞ーこ順こ
らざこを疫鬼こいこ孔子曰。鬼神之為德。其盛矣乎。視之
而弗見。聽之而弗聞。體物而不可遺。使天下之人。齊
明盛服以奉祭祀。洋洋乎如在其上。如在其左右。詩
云。神之格思。不可度思。矧可射思。朱註程子曰。鬼神者二気良
天地之功用。而造化之迹也。張子曰。鬼神者二気良

能也。朱子謂。以二気言則鬼者陰之霊也。神者陽之
霊也。以一気言則至而伸者為神。反而歸者為鬼。其
實一物而已。亦曰。鬼神無形與聲。物之終始莫非
陰陽合散之所為。是其為物之體而物之所不能遺
也。故聖人鬼神の德を称して其上に在が如く其左右に在が如しと
實にその上にありその左右に在るなり。人
の寛鬼疫鬼をうるも亦如くの如くその気に觸るゝに因て眼前に在が
如し。水火の原形なけれども人火の燃泉の流々をうる風雷も亦
形なけれども人風雷鳴をうるその声を聞寛鬼の説經ぶべし
仏説にも人善なれば天堂に生じ悪なれば地獄に墮るのいとれ
を餓鬼と名の和名鈔云。孫愐云。餓鬼鬼也。餓五箇反訓
與飢同。久飢也。内典云。餓鬼[illegible]甚喉如針不得飲水。

見水則変成火。とゝ飢渇の人の憎む所なり。餓鬼とのみ歌書
悪の気の主とゝ善を神と悪を鬼とゝ亦これ故あり俱
舎論頌に鬼以見為日。以五百人間一月為一日。而壽
五百歳。とゝ蛇足の辨ゝその妄なること甚し。雲霧風
雷水火鬼神の画者悉これを画くゝるの雲霧風雷水火いその形
なのなを知るとゝを以て妄なりとゝ鬼神に至ゝ妄とゝ實にその
形なりと毋りゝ左平記に載
天智天皇の御宮の森原に方とゝの
りのあるゝ金鬼風鬼水鬼隱形鬼とゝの四の鬼を使ひゝり好賀好
夢の両國これなるに妨られゝ王化に須ゝのあるに妄に紀朝雄とゝる
りの宣旨を蒙れゝ彼國にあり一首の歌を綠ゝ鬼中に送りゝその
歌　草も木も我大君の國なれいとゝ鬼の栖なるべし四の鬼とゝの歌
をゝゝ忽ちに去ゝ失ゝ千方勢を失ゝ聽ゝ朝雄

亦討られ〜とのつり是その鬼といふものの狐狸狐狼の徒と共を鬼共と
いへば狐狸の假鬼なり亦鬼共の気共なるこれが息の夜ハ出るものの
なれどこれも共を鬼共といふの歌式の坂上田村麿勅を奉て鈴鹿
山の鬼を討とるのよし〜妄なり 叡の巻に亦云美田須次綱頼光羅
宝の昊剣を帯て夜一條大宮へ使に反橋より干て鬼のまを切るこ
ろ〜頼光その剣を鬼切と名ぶ〜とるの式い反橋を羅城門まで
ひきこん世よりの所部晴明織神を使役し後その鬼を一條反橋の
上より封じ源頼光朝臣勅を奉て大江山の悪鬼を討亦の説あり夫
鬼神ハ形なき形なれば何をか斬何をか役ちん鬼と人と
同じ〜縦透歌を詠こ〜られ賜とも解とべ共ハ俗人なら詩
歌を志ら〜ど鬼も亦決〜〜詩歌を感ぜざるとなれば〜〜られを感ず
るものハ悪鬼なれば悪鬼なれば人式を残業ならど 詩品

云。微ー藉之以昭ー告。動ニ天ー地ー感ニ鬼ー神。莫ー近ー於詩。賢之介亦
序よ亦云ちらをもいまだ〜〜あつらをうどめ〜めよみえぬ
神をもあこれと毋りハせをとと女のるをもあらぐ〜ひたりのぬのも
をもなぐさむるものハ歌なり云云これ詩歌の徳を美をるゆその實よ
過ぎり天ハ左旋〜日月ハ右旋をとのふりのハ只理のそそ動くや動ざ
るやハ人のこれをそんとなる事よあらぐ人ハ地上よ立をりくたる〜その地震
をなるなれども人〜〜これを動ちよあらどの天地ハ固よ動とをろらどいう
ぐの鬼神を感ちめんの〜詩歌をるく天地を動り〜鬼神を感ぜ〜
ひるのあらぐ業なが真龍を憎むよ笑〜〜せ人ものるぐ住白秀歌を
憎ちん曩よある人ハ〜ハらあり 歌ならハ〜ハ〜ハ天地のう
ぐれいぐ〜〜たるものの千古の人り〜世よあるゆあらぐ貫〜〜るのらど
絶倒ちべ〜亦彼頼光朝臣綱よ命じて羅城門よ建る所の榜示今

なれ京師なる某の家蔵とものの子近とろあの撥を模したる墨本一
幅を仕うらはるゝとれを聞せるよ疑ひなきもあるべしもの撥手折
くその文全くさんざも変化退治の告文と不審なり墓録也
王往昔ハ妖賊を鬼とも変化ともいへるべし世俗を真の鬼
なりとはいたづら物の醜悪強大なるものをもべて鬼とのみ
本邦の古實欽草花よ鬼百合鬼薊より酒煙草蕃椒よ鬼ろしの
名あり馬よ鬼鹿をあり剣よ鬼切鬼丸あり軍書よ鬼神と呼ぶたる某生
を討ちぬと軍陣よ角矯をる処あるをんとも朝雄頻光の退治ぬ
ハ真の鬼よあらざるを知らん鬼切鬼丸の剣も亦さるを鬼を切ぬ名
付けたるあれあるべし鬼百合鬼薊よりて鬼の如く後人附會の説をなと
つを羅生門ハ拾坂拔よ羅城門よ似る垣基羊二尺大行七尺溝廣一丈東西南北狐狸ぬのどく注
ちり今人ハ羅生門と書きたれをちちろうんと読いろいちのんと

喝べたるや小世法物語字治拾遺物語ハ　栖原の御時ちいちいハ
高丸をこちらとちらくとありちらをうりんハ僻続るべしされど兼好が徒然
草よ載たり伊勢國の鬼のゝ當時のくちんをいのゝ眼箭をるも
のいのゝとどめくと鬼とのいのべけ亦按ずるよ神代紀よ大神軻遇突智
の生るゝよ至ゝ甚伊弉冊尊焦ゝ化ものゝ伊弉諾尊
黄泉よ入ゝ泉ゝ結ぬのよ膿沸虫流ゝをゝ急よ走ゝ廻ゝ
あの時伊弉冊尊恨ゝ泉津醜女八人を遣ゝ追留んとゝぬと
ありとれ陰陽相別るゝの義欽醜女ハ鬼女なり今世よ大神の御小鬼
面あるものをちゝ大神とのみちゝ醜女ハ醜女ゝみとめと通ぶ日本紀の
説伊弉冊尊を陰とゝ伊弉諾尊を陽とゝ又伊弉冊尊を鬼とゝ伊
弉諾尊を神とゝとよ毋のゝ信ず鬼神ハ陰陽死生の義と

○頼光の四天王ホがゆハ古今著聞集今昔物語ホいんえたれど平

季武平公時平貞道又材岡立麻呂平貞通（亦今昔物語に材岡立麻呂平貞通を悪鬼に列入うべし）と
のりて部臼井酒田などと稱るものいさらに綱がるもいえども前六平
記とつゝものいうられぬ説のそ妙ほうまちろるよ近曾文人墨客
動されば彼書を引用して放事を談ずるものありてろ得がる
○鬼とゝいふ字はいの名とまべくもあらじ孫呉よ唐山戰國の時鬼谷子
のり亦義経記に鬼一法眼あり云れも紀一なるべしと徂徠翁いつゝ禄
のところ伊丹の俳諧師よ鬼貫といふものあり呉のそのを義をもべ
○今東北の隅を鬼門とゝいふ風俗通よ東海度朔山よ有大桃樹。其北
有鬼門神荼鬱壘ゝ神守之主領萬鬼。といふ出るゝ桃符桃
板も唐山の俗呪なるゝ黄帝宅経よえたり其説
陽宅陰宅無魂五虚四實ホの月あり高廉が相宅要説よのるゝ
葛孫の上葛孫を添よ昔人既よ宅相を信ずと東家の西は西家

の東とゝいふの一句ゝその意ふのを諭さるよ呉ゝん
○昔ゝ美女をさゝと鬼とゝいひり拾遺集よ平兼盛へ
呉の黒瀛よ鬼ゝれまとゝいふのゝとゝと鄭ゝい呉ゝ外面如菩薩内
心如夜叉の義なるべゝ如れば究竟を鬼とゝひゝんも準ゝるべ

辯歌古凶追考

壬生忠岑宣旨ゝゝと春の歌ゝりゝゝ雲のきりおるゝ
ゝるを弱恒ゝゝよ難ゝゝりゝゝその中ゝゝゝ
名抄巻下に見る顔ゝるゝ

十訓抄巻二に見る
慨用抄俊頼朝臣